

里山に託す私たちの未来

第5回 里山フェスティバル「里山シンポジウム」

かつて里山は、私たちの生活・生業を支えるとともに、多くの生きもの命ののゆりかごでもありました。しかし今、里山は大きな危機に瀕しています。豊かな里山をこどもたちの未来につなげるため、今回は、命のにぎわい(生物多様性)の視点から里山を考えます。

2008年テーマ

いのち 里山と生命の にぎわい

全体会 2008年5月18日(日) 10時半～17時

会場 東京情報大学メディアホール

分科会報告

記念講演

岩槻邦男氏(兵庫県立人と自然の博物館館長)

パネルディスカッション

県内農林業従事者

ケビン・ショート氏(東京情報大学環境情報学科教授)

堂本暁子氏(千葉県知事)ほか

デザインイラスト 松下優子
テーマ題字 倉島貴浩(ワークホーム里山の仲間たち)

主催 里山シンポジウム実行委員会、千葉県、千葉市、東京情報大学
(社)千葉県緑化推進委員会、ちば里山センター

風薫る5月、水田は緑の絨毯を思わせる季節となりました。本日はたくさんの方々がお集まりいただきありがとうございました。

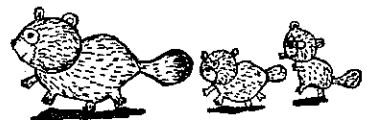
このシンポジウムは、第54回全国植樹祭の翌年、県民の発意により、第1回を木更津市にて開催しました。その後我孫子市、八千代市、東金市にて開き、いずれも県、地元自治体、大学等のご支援をいただきながら市民が主体となって企画運営を行ってまいりました。活動を始めて6年になりますが、この間「里山」という言葉は、だいぶ耳慣れた言葉になってきました。里山の大切さがより深く認識される時代となりました。

毎年の共通テーマは「里山に託す私たちの未来」ですが、今年は千葉市が共同主催者としてご支援くださり、サブテーマを「里山と生命のにぎわい」として、里山を生物多様性を育む大切な場所として注目することとしました。22の分科会が県内各地で開かれ、里山を取り巻く人々の自立した循環的な営み（なりわい）が、里山を守り育てるのだという大きな社会的なうねりに繋げる願いを持って進めております。各地で具体的な運動の成果ともいえる事例を挙げることもできるようになってきました。本日は長時間に亘りますが、最後までご参加下さるようお願いいたします。

堂本知事、鶴岡市長、新沼学長を始め、ご協力下さった多数の団体の方々のお力添えのお陰で本日の会が開けたことに感謝し、里山シンポジウム実行委員会代表としての挨拶といたします。

プログラム

- 10:30 開会・あいさつ 金親博榮（里山シンポジウム実行委員会代表）
林孝二郎（千葉市副市長）
新沼勝利（東京情報大学学長）
- 10:50 分科会報告
- 12:00 昼食・休憩 体験：ケビンと歩く大学構内の里山
映像：コンピューターがとらえた里山環境
- 13:30 「里山：地球温暖化と生物多様性」堂本暁子氏
- 13:50 記念講演 「里山：人と自然の共生の場」岩槻邦男氏
- 14:45 休憩（10分）
- 14:55 パネルディスカッション「里山と生命（いのち）のにぎわい」
- 17:00 閉会
- 18:30 懇親会（谷当グリーンクラブキャンプ場）



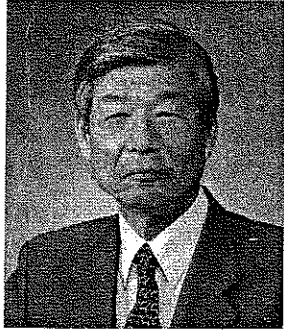
分科会報告

コーディネーター 中村俊彦（千葉県立中央博物館副館長）

報告者

第1分科会	里山と森林・林業	稗田忠弘	第12分科会	里山WEBGIS情報の活用	荒尾稔
第2分科会	里山と技能伝承	木下敬三	第13分科会	里山と政策1	小西由希子
第3分科会	里山と観光と食	遠藤イサム	第14分科会	里山と政策2	金親博榮
第4分科会	里山と動物福祉	石山 大	第15分科会	里山と医療・福祉	増田 淳
第5分科会	里山と農業と水鳥	荒尾 稔	第16分科会	里山と文化・伝統	清藤一順
第6分科会	里山と里海	手塚幸夫	第17分科会	里山と教育	佐野郷美
第7分科会	八千代の里山	高橋秀文	第18分科会	里山と生物多様性	鈴木優子
第8分科会	千葉市の里山と農業	萩原康弘	第19分科会	里山と竹	田代武男
第9分科会	我孫子市と里山	木村 稔	第20分科会	里山と水循環	桑波田和子
第10分科会	里山と残土産廃	井村弘子	第21分科会	里山と都市緑地	山田純稔
第11分科会	里山と森づくり	奥山正人	第22分科会	里山と生物多様性	加藤賢三

記念講演 「里山:人と自然の共生の場」要旨



里山という言葉に正確に対応する英語はない。そういう現象や概念がないためだろう。里山が日本的であるとはどういうことか。日本列島の開発にとって、里山とは何だったかを考えてみたい。人と自然の共生という標語は、日本ではすんなり受け入れられた。しかし、この標語を英語にして欧米人に説明してもなかなか理解が得られない。欧米にはない概念だからである。里山を育て、自然と共生して生きて来た日本人の自然観とは何だったのか、日本人のこころの在り処を考えてみたい。西欧文明に、追いつけ追い越せを100年間で見事に達成した明治以後の日本の発展とは何だったのか。日本人は何を得て、何を失ったか。地球の持続的発展を考えようという今、日本人は世界に何を訴えるか。里山の荒廃といわれる現実を直視し、生物多様性の持続的利用のみちを探りたい。

プロフィール 岩槻邦男氏

1934年兵庫県生まれ。京都大学理学部植物学科卒、同大学院修士および博士課程修了。京都大学助手、助教、教授を経て、東京大学理学部教授および同附属植物園長、立教大学教授、放送大学教授や日本植物学会会長、国際植物園連合会長等を歴任。現在、兵庫県立人と自然の博物館館長、東京大学名誉教授、生物多様性 JAPAN 代表。

1994年に「植物の多様性の解析およびその滅失に関する保全生物学的研究」により、日本学士院エジンバラ公賞受賞。2007年に文化功勞者として顕彰された。

日本の植物分類学を世界の第一線に押し上げた植物分類学者。分子系統学的研究を推進し、シダ植物、裸子植物の系統関係を世界に先駆けて解明した。また、中国西南部から東南アジア全域にわたる植物相の調査・研究のために多くのプロジェクトを立案・実施し、日本と現地の研究者が一体となったの植物多様性研究の発展に貢献。

生物多様性の視点から生物種の絶滅や地球環境の問題を社会に訴えてもいる。在野の植物研究者と協力して日本の植物レッドデータブックの作成を行うほかに、数多くの普及書・専門書の出版及び講演等を通して、一般の人々から専門家に至るまで、生物多様性の保全に対する知的好奇心を刺激し続けている。

著書・共著多数。日本絶滅危惧植物(1990 海鳴社)、多様性の生物学(1993 岩波書店)、植物からの警告・生物多様性の自然史(1994 日本放送出版協会)、文明が育てた植物たち(1997 東京大学出版会)、温暖化に追われる生き物たち(堂本暁子共編著 1997 築地書館)、生命系・生物多様性の新しい考え(1999 岩波書店)、進化・宇宙のはじまりから人の繁栄まで(2000 研成社)、多様性からみた生物学(2002 裳華房)、日本の植物園(2004 東京大学出版会)、温暖化と生物多様性(堂本暁子共編著 2008 築地書館)など。

パネラー・コーディネーター

堂本暁子(千葉県知事)

TBS入社。記者・ディレクターとして報道番組やニュース番組の制作に携わり、1980年「ベビーホテルキャンペーン」で、日本新聞協会賞・放送文化基金賞・民間放送連盟賞などを受賞。参議院議員として、環境基本法、生物多様性条約、NPO法、男女共同参画社会基本法、DV防止法などの立法、審議に深くかかわる。主な著書『生物多様性—生命の豊かさを育むもの』(岩波書店)。主な編著『温暖化と生物多様性』(築地書館)他。

手島芳枝(山武木楽会 農林業家)

山武(さんぶ)木楽(きらく)会会長 山武郡芝山町在住。学校終了後東京で会社勤めを経験。山武郡芝山町の農林業家の手島三知男さんと結婚。父は抑留から帰還後「丸朝出荷組合」を組織し、農業、地域振興を通じた地域住民の生活向上に約40年間取組む。夫は芝山町森林組合長を歴任。平成18年 森林に関心を持つ地域の女性グループ「山武木楽会」を立ち上げ林業の問題について、考え行動している。会員は林業、椎茸生産者 一般市民、行政職など現在8名。

ケビン・ショート (Kevin Short) (東京情報大学環境情報学科教授)

東京情報大学環境情報学科教授。米国ニューヨーク生まれ。スタンフォード大学大学院修了。専門は文化人類学、民族植物学。1972年に来日。1987年から千葉県印西町(現印西市)に住み、里山自然のフィールドワークを始める。新聞・雑誌に自然をテーマにしたエッセイを寄稿するかたわら、テレビ・ラジオ、自然観察会や講演活動を通じて、環境教育に積極的に関わっている。主な著書「ケビンの里山自然観察記」(講談社/1995)、「ケビンの観察記 海辺の仲間たち」(講談社/1999)、「ドクター・ケビンの里山ニッポン発見記—カントリーサイド・ウォーキングのすすめ」(家の光協会/2003)。

藤倉清一 ((社) 千葉県観光協会専務理事)

千葉県若葉区生まれ。千葉市役所に勤務し市民最前線の部門を幅広く経て、後半は農政を担当する。農政部在職中は生まれ故郷の農業・農村を守っていこうと、「いずみグリーンビレッジ構想」の立ち上げや、千葉市第1号の里山地区「いずみの森」の指定、間伐材の有効利用や公共建築物の木造化の提唱など、斬新な発想のもと「思い立ったら吉日!」と即行動、破天荒な性格の一方、漬物や菓子などの農産加工品を自ら研究・開発するという繊細さも持ち合わせた性格の持ち主。千葉県農政部長を経て現職。現在東金市在住。

金親博榮 (里山シンポジウム実行委員会代表・ちば里山センター会長)

1970年大学卒業。1990年退社後農林業專業となる。1992年谷当グリーンクラブ・1994年「わたしの田舎」谷当工房開設。千葉市森林組合理事副組合長、印旛沼土地改良区分区長、千葉市いずみグリーンビレッジ推進委員、NPO千葉自然学校理事、NPO千葉県市民農園協会理事。

原慶太郎 (東京情報大学教授)

東京情報大学環境情報学科教授。総合情報学部長。山形県米沢市生まれ。東北大学大学院修了。専門は景観生態学、環境情報学。1988年、東京情報大学開学とともに千葉に移り住み、現佐倉市在住。1996-1997年に英国ロンドン大学でカントリーサイド(里山)保全の研究に従事。「生物多様性ちば県戦略」専門委員(副会長)。千葉県環境審議会自然環境部会長。主な著書・訳書。「景観生態学」(文一総合出版/2004)、「自然環境解析のためのリモートセンシング・GISハンドブック」(古今書院/2007)。



協賛団体

我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会、石神谷津の四季を楽しむ会、夷隅郡市自然を守る会、市川緑の市民フォーラム、NPO法人環境カウンセラー千葉県協議会、NPO法人子どもの文化ネットワークソレイユ、NPO法人しろい環境塾、NPO法人竹研究会、NPO法人千葉県市民農園協会、NPO法人千葉自然学校、NPO法人ちば環境情報センター、NPO法人千葉まちづくりサポートセンター、NPO法人八千代オイコス、小びつ川の水を守る会、上総堀り伝承の会、環境パートナーシップちば、グループ2000(環境に学ぶ)、ごみゼロネット21、桜宮自然公園をつくる会、残土・産廃問題ネットワーク・ちば、山武に雑木林をつくる会、山武町環境問題連絡協議会、さんむ・アクションミュージアム、さんむフォレスト、山武木材協同組合、自然と文化研究会、下泉・森のサミット、(社)千葉県建築士会、生活協同組合パルスシステム千葉、関さんの森を育む会、ちばNPO協議会、千葉県がんセンター、千葉県建築家協会、千葉県自然観察指導員協議会、千葉県手をつなぐ育成会、千葉県森林組合北総支所、千葉県精神保健福祉協議会、千葉県千葉リハビリテーションセンター、千葉県木材市場協同組合、千葉県木材振興協会、ちば生物多様性県民会議、千葉市森林組合、ちばのたね、ちば・谷津田フォーラム、利根川下流域に大規模な水鳥の越冬地第2局を形成する会、日本雁を保護する会、農薬空中散布反対千葉県連絡会、人と自然をつなぐ仲間・佐倉、PWプラスONE、プロジェクトとけ、北限のトビハゼを守る会、ぼんた里山の会、緑の環協議会、都川と丹後堰公園に親しむ会、街づくり市民の会、三芳村生産グループ、八千代自然と環境を考える会、八千代市ほたるの里づくり実行委員会、谷当グリーンクラブ、有害物質から子どもの健康を守る千葉県ネットワーク、有機農業推進千葉県ネットワーク、四街道プレーパークどんぐりの森、「わたしの田舎」谷当工房、ワークホーム里山の仲間たち